

## あとがき

本論文集は、国際日本文化研究センター（平成十六年三月末までは文部科学省の所轄、同年四月一日以降、大学共同利用機関法人、人間文化研究機構に属する）において、平成十五（二〇〇三）年四月より平成十八（二〇〇六）年八月まで、編者が主催した共同研究会《京都を中心とした日本の伝統工芸、その過去・現在・将来》The Past, Present, and the

Future of Kyoto Traditional Crafts の報告書の一環をなす。市販の報告書とすることにあたり、題名を『伝統工芸再考 京のうちと』とし、副題に「過去発掘・現状分析・将来展望」と付した。その「主旨と目標」は、冒頭の「まえがきにかえて」に示したとおりである。また三年半にわたる共同研究会の実施概要に関しては、巻末の活動記録をご参照したい。

伝統工芸の研究とは、美の価値観をめぐる現在の社会的混迷を明るみに出す営みにほかならない。十八世紀の末にエマ

ニエル・カントの『判断力批判』によって定式化された藝術観は、今なお美学的な藝術考察の枠組みを規定している。だが創造する個人主体、独創性の発露としての、自律的な藝術作品、代替不可能な固有性をもち、複製とは峻別される原作という価値観などといった啓蒙の理念は、すでに耐用年限を越え、世界大に拡大するとともに疲弊し磨耗して、近代の終焉とともに破産を宣告されている。そして二十世紀の閉幕とともに、美術そのものの終焉が喧伝されるに至った。

そこに本書の立脚点もある。そして、時代の混迷は文字表記にも発現する。お気付きの様に、本書では「藝」と「芸」が混用されている。一般に歴史資料に見える文字は、原文尊重を原則とし、引用者の判断で表記を改変する場合には、その旨注記するのが仕来りだ。だが行政用語などは、現行の当用漢字表記に従わねばならない。さらに、各寄稿者の用字法は、各寄稿者の意思を尊重するのが筋だろう。以上の原則に抵触しないかぎり、編者は「藝」の一字に関しては、例外規定として正字体を優先した。「藝」と

「芸」（ウン・くさぎる）とは字義を異にする。これを「芸」に還元することは、「藝」に込められた価値の喪失を伴う。結果としての、藝と芸との不揃いは、しかし、あえて甘受した。なぜなら、失われた文化の痕跡の一端が、不揃いとして目につくならば、それが、ほかならぬ現在の混迷を指し示す表徴となるからである。混迷する現在、「美術後」を司る理念

はなお姿を現してはいない。五里霧中のみなかで、藝術の未来を模索するには、美術以前あるいは、美術の領域外に排除された文物に注目し、その排除の論理を洗い出すことが不可欠だろう。「工藝」とは美術の成立とともに、そこから排斥され、産業革命の進展とともに、工業技術からも見捨てられた残存領域だ。そして his と to his とが藝術と技術へと分化する以前の世界の実相は、ほかならぬ藝術と技術を二分する近代思考の枠組みが、覆い隠してきた。だが二世紀に渡る思考慣習の束縛から心身を振りほどき、精神を刷新するのは容易でない。というのも、思考の道具たる言語そのものが、慣習の枠組みへの適応によって習得されるため、

その枠を取り払ってしまうと、言語思考そのものが立ち行かなくなるからだ。それなら、言語思考の限界を超える契機が、造形思考や身体思考には宿っているのだろうか。残念なことに、無垢な視覚も無限定な身体感覚も、人間存在には期待しがたい。そして「ことば」で「もの」を掴もうとしても、かえって両者を隔てる距離が、思考の到達に対する障害として立ち塞がる。

思考一般の限界というこの困難な課題に正面から挑戦し、と同時に、自らの言葉を持たない「工芸」という他律の造形領域に「人類史的な課題」が孕まれていることを終始力説されたのが、世田谷美術館の名誉館長、大島清次先生だった。

本共同研究は、その提言に導かれて船出した。だが、航海の道半ばで、京都伝統工芸の生き字引であり、得がたい水先案

内人であった西口光博先生を不意に失った。また成果をお手元にお届けしようとする矢先に、精神的な支えであった大島の清次先生も、この世から旅立された。喪失に瀕した伝統文化の継承にはいかなる価値があるのか。それを問うこの研究会は、かけがえのない方々の喪失と裏腹に生まれ落ちることとなる。お二人の霊に本書を捧げたい。至らぬところ、及ばぬわざの多い無念を心に刻むために。そして喪失が文化の進展と不可分の代償であることを忘れぬために。

なお、巻頭には「京都創造者憲章」を掲げた。起草者の芳賀徹先生のご快諾を得たほか、京都商工会議所 プロジェクト推進室から許諾を頂戴した。また龍村光峯氏からのご寄稿には、付属資料として濱口恵俊先生の一文「超近代の宿る工芸」が掲載されている。掲載にあつ

ては、濱口先生よりご快諾を得た。記して謝意を表す。

本研究書上梓のためには、思文閣出版の後藤美香子氏の献身的なご努力を忝くした。膨大な質量に及ぶ原稿を、それは見事に編集して頂いた。末筆ながら、共同研究員一同に代わり、編者として、深謝の意を表し、その労に報いたい。

本論文集の掲載の論文のうち、国際日本文化研究センターにおける共同研究会に参加した共同研究員による論文は、科学研究費補助金「基礎研究(B)工芸における伝統と革新・京都を中心とした職人産業の歴史の変遷と現状分析」(平成十六—十八年)の成果の一環をなす(\*)。

平成十八年十二月六日夜

木霊する狐の鳴き声を耳にしつづ

ワシントンDCにて 編者 稲賀繁美

(\*) Acknowledgements: Finally, my thanks in English go to the J.W. Klinge Center at the Library of Congress, Washington, D.C., for providing me with a grant-in-aid that allowed me to accomplish the research required during the final phase of the editing and proof reading of the present volume. I am grateful to all the staff members and to my colleagues who supported my work during my stay in Washington and made this publication possible.

Shigemi INAGA